

1-7					
主題	口腔衛生向上に向けた職員意識の定着と新規支援策の効果検証				
副題	OHAT（オーラルヘルスアセスメントツール）活用とケア手順の標準化への展開				
キーワード 1	口腔衛生向上	キーワード 2	職員意識の定着	研究(実践)期間	264 ヶ月

法人名	社福）台東区社会福祉事業団	事業所名	特別養護老人ホーム谷中
発表者（職種）	永牟田ちふみ（介護主任）、天野由貴（介護職員）		
共同研究(実践)者	丸山みどり（歯科衛生士）		

電 話	03-3824-1094	FAX	03-5685-3596
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	平成元年5月に開設、2フロア、入居者50名・ショート6名の従来型特養である。平成 11 年より誤嚥性肺炎の予防と「最後の一口まで食べたいものを食べられるように状態に合わせた支援」を目指し、歯科医をはじめ多職種と連携した口腔ケアに取り組んでいる。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

入居者の口腔衛生向上を目指し「アクティブ福祉 2025」の方針に沿って取り組みを継続してきたが、改善が困難な例が見られた。そこで歯科衛生士との連携を更に強化し、介護士が助言を基にケアの質を高める仕組みづくりを進めた。特に改善がみられなかった S 氏への新たな支援方法を検討課題とし、単なる実施にとどまらず、施設全体でより効果的な口腔衛生ケアの質向上に取り組むこととした。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

歯科衛生士との連携を強化し、職員全体の口腔衛生への意識を継続的に高めることを目的とした。専門的な評価や助言を日々のケアに反映させるため情報共有を見直し、介護士が口腔内の変化に気づきやすい環境整備も進めた。これにより、改善がみられなかった S 氏の口腔状態の向上に加え、職員が誤嚥予防における口腔ケアの重要性を再認識できると考え、取り組みを進めた。

《3. 具体的な取り組みの内容》

（1）研究期間：2004年4月～2026年6月

（2）研究方法

- ①歯科衛生士から介護士への評価・助言を確実に共有し、より質の高い口腔ケアを実施できるよう、情報共有の方法を見直した。
- ②当施設版 OHAT を歯科衛生士と共同作成し、口腔状態を数値化することで職員が同じ基準で状態を把握し、ケアの質を統一して向上させた。S 氏（89 歳、女性、要介護 3、認知症ⅢA）は自歯 28 本が残存している一方、日々のケアでも歯肉出血が続いていたため、誤嚥予防の観点から重点対象と判断。OHAT による客観的評価を導入し、チームで改善に取り組む。
- ③フロアミーティングでは S 氏の状態やケアの課題を共有し、職員間で対策を検討する場を設け、ケアの統一と質の向上につなげる。

④さらに、舌苔除去のための保湿剤を使用し、口腔乾燥の改善と清潔保持を図る。

⑤感染症予防を徹底するため、口腔物品の管理方法を徹底し、衛生管理を強化する。

《4. 取り組みの結果》

①助言共有方法の改善：歯科衛生士からの助言をこれまで通り連絡ノートで共有するだけでなく、評価表に確認欄を設け、介護士が内容を確認したうえでサインできるよう変更した。その結果、助言が確実にケアへ反映されるようになった。

②客観的評価を強化：今回は歯科衛生士作成の図表を用いて口腔内を視覚的に説明したが、今回はさらに協議を重ね「当施設版 OHAT」を作成し、口腔状態を数値化して評価できるようにした。歯肉・粘膜、清掃、舌苔、口臭を 0～2 点で評価し、S 氏の状態を継続的に確認した。S 氏のスコアは R7.7：7 点、R7.9：4 点、R7.10：0 点と改善したが、R7.11 では 3 点とやや悪化がみられ、継続的な評価とケア内容の見直しが必要となった。

③フロアミーティングでの対策（令和 7 年 11 月）：S 氏のブラッシング方法に職員間のばらつきがあることが判明し、手順掲示による統一と 10 秒長く磨く取り組みを導入した。約 1 か月後には歯科衛生士の評価が 2 点に改善したが、10 秒の感覚に差があったため 12 月からタイマーを使用。結果、OHAT は R7.7 の 7 点から 2～3 点で安定した。

④舌苔除去のための保湿剤使用：保湿剤の使用を開始したところ、舌苔の付着が軽減し、歯科衛生士の評価でもさらなる改善が認められた。

⑤口腔ケア用品の衛生保持に関する対策：口腔内の健康を守り、感染症を防ぐために、歯ブラシは 2 か月に 1 回を目安に交換。毛先が開いてきた場合は、2 か月を待たずに適宜交換した。コップと入れ歯ケースは週に 1 回消毒。個人の物品には必ず名前を記入し、共用しない。これらの対策を続けて行ったことで、口腔ケア用品を清潔に保ち、利用者の健康維持と感染予防につながっている。

⑥取り組みの施設全体の拡大：2 階フロアでの取り組みが良い効果を示したため、3 階フロアにも共有し、施設全体で口腔衛生向上に取り組む体制へ広げた。令和 8 年 6 月には、歯科衛生士より施設全体の口腔ケアに対する高い評価を得ることができた。

《5. 考察、まとめ》

S 氏の事例を通して、OHAT の導入、評価表の改善、ブラッシング手順の統一、タイマーの活用など、歯科衛生士と連携しながら新たな取り組みを積み重ねてきました。その結果、職員一人ひとりの口腔衛生への意識がこれまで以上に高まり、継続して取り組める体制が整ってきた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ・最新介護福祉士養成講座 7 生活支援技術Ⅱ 第 3 版（2026）介護福祉養成講座編集委員会
- ・日本摂食・嚥下リハビリテーション学会雑誌：口腔アセスメント Oral Health Assessment Tool(OHAT)と口腔ケアプロトコルによる口腔衛生状態の改善

《8. 提案と発信》

確実なチェック方法の導入と評価の数値化により、職員間で共通基準ができ、統一した口腔ケアが実施できるようになった。その結果、口腔衛生の維持や誤嚥性肺炎の予防に良い影響がみられている。今後も職員が継続して口腔衛生を意識できる仕組みづくりが重要であり、現在は AI による歯茎の状態確認の導入も検討中である。また、昨年度には他県の特養から発表後に連絡を受け、当施設の取り組みを紹介する機会を得た。以降も交流を続け、他施設と情報共有しながら、口腔衛生への意識向上を図っていきたい。